軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第６５号
2026.06.05

音楽に満たされる日々（３） 蓄音機

真崎 隆治（ バ ス ）

練馬は、東京の町はずれというより、農村地帯がはじまる所といった土地柄だった。東京の市街地の大部分が空襲により焼き払われ、悲惨な姿を戦後にさらしていたが、練馬のあたりは焼け跡ひとつなく、大正から昭和初期の日本の姿そのままを残しているようだった。

私たちは西武池袋線の池袋から３つめの江古田駅で降り、北に１０分たらず歩いたところに住んでいた。住宅街は駅の周辺のみで、住んでいたあたりで住宅街は終わり、畑が広がりはじめ、やがて細い水の流れが森を区切っているようなところになっていた。住宅が途切れたあたりから道は下り坂になり、それを５分も石神井川（しゃくじいがわ）にぶつかった。

子どもたちの遊びは、あたりに多く残っていた空き地や、自動車など滅多に通らない道路での野球や、木の上に家を作ったり、木の枝に縄を結びつけ隣の木まで跳びうつるターザンごっこをしたり、暑い時期なら川に遊びに行くのだった。それは外に遊ぶ場所がたっぷりある子どもの天国みたいな世界だった。

なかでも石神井川は最高だった。川幅は５、６ｍでほぼまっすぐに流れ、深いところで４０cm ぐらい、岸辺は２０cm ぐらいだった。４０cm は小学生には少し深すぎるが浅瀬をうまく選べば向こう岸と行き来するのにそれほど苦労はない。流れ中央の深みには鮮やかな緑色の帯を揺すらせながら川藻が茂り、初夏のころは白い花を流れの中に咲かせ、爽やかな美しさを生み出していた。またときには近隣の農家の人が染めた布をさらすために、その先端を川底に石で止め並べていた。すると川の中に色の川が流れるのだった。

川ではザリガニ、ドジョウ、タニシなどが捕れた。魚もいたはずだ。石神井川は石神井公園の池から流れ出している。しかし本当の源になる泉は公園の池の奥手から道一本渡ったところにある三宝寺池なのだ。周囲を背の高い木々に囲まれ昼なお暗いようなこの池には年中暖かい澄み切った水が豊かに湧きだしていた。池の中央に小島があり、そこは牧野富太郎博士がさまざまな植物を発見したところであった。冬には鴨など多くの渡り鳥が飛んできていた。そして池の底にはトゲ魚が棲んでいた。背中にトゲが生えている５cm ちょっとの小さな魚だが、魚同士で求愛し、水の中に巣をつくり、子を育てるという珍しい魚である。高校生のころ三宝寺池で実際に姿を見た魚であるが、自然の

崩壊とともに今はもういなくなっているだろう。ともあれ、あの頃の石神井川には トゲ魚ならずとも何らかの魚はいたはずである。

練馬の家に桜が４本あったことは前回に述べたが、名前までは書かなかった。４本のなかには珍しいものもあったので、ここで紹介しておきたい。４本は、３月末に真っ白な花をつける「山桜」、４月はじめに咲く「染井吉野桜」、４月末ころに緑色の花をつける「鬱金桜」、５月初めに咲く「八重桜」である。このうち緑色の花をつけるウコン桜はきわめて珍しく、私は東京の神代植物園と、横浜桜木町近辺の川岸で桜並木の中に１本見つけただけである。

ついでに言えば、軽井沢で見かけて 大林さんにお尋ねしたところ、上溝桜（うわみずざくら）だと教えていただいたが、これも私にはかなり珍しいものだった。なにしろ白い毛虫みたいなものが枝に沢山ついているように見えるのだ。毛虫のようなものをよく見ると小さな桜の花がぎっしり詰まっている。大林さんによればこのあたりにはそれほど珍しくないとのことだったが、軽井沢の人であっても、はじめてこの木を目にした時には、これが桜の仲間の木だと言える人はまずいないだろう。でもこの木はその後いつの間にか我が家の庭の片隅に、まるできちんと図って植えたように生えてきて、今は屋根を越す高さに育ち、毎年４月末から５月初めに不思議な花が満開に咲いている。なるほど、これなら軽井沢ではさして珍しくないわけだ。

さて、練馬の庭の染井吉野が咲き始めると私は石神井川に出かける。両岸の土手には間をおいて桜が植えてあり、ここの花も咲き始めている。それはまた岸の土手にヨモギが芽生えてくる合図でもあった。いい香りのするヨモギを持ち帰ると その夜は「草餅」が食卓を飾ることになっていた。土手では、フキノトウ、ツクシ、ノビル、ハコベなどが採れた。終戦直後で食糧難であったから、これらの収穫は遊びと実益をかねていた。それだけでなく、日本の春の美しさを堪能できたのも嬉しいことだった。朝早くにぎにぎしく鳴きながら空高くのぼりゆくヒバリ、一面レンゲのピンク色にそまっている田んぼ、菜の花のまぶしい黄色、広い野原に朝を告げる雄鶏。

鳥といえば、朝と夕に黒い川のような列をなして大空を往き来するカラスと、町にいる雀ぐらいしかいなかった天津とは違い、石神井川周辺では様々な鳥がそれぞれのきれいな声で鳴きかわしていた。

石神井川の鳥たちの話をしているうちに、天津ではないが、天津と大連とのあいだにペータイホーという名の海辺の避暑地があり、そこに不思議な鳥がいたことを思い出した。５歳のころのかすかになった記憶なので、ペータイホーを表す漢字とか、正確な場所は分からないが、そこには＜ペータイホー＞と鳴く鳥がいた。私自身その鳥が＜ペータイホー＞と鳴くのを幾度となく聞いて、不思議な鳥だと思った。このことをいま書き

留めておこうと思う。なぜなら、今度はいつ思い出せるか分からないし、自分の年齢ではもう思い出すこともないかもしれないからだ。

だがなにも大それた話ではない。ペータイホーには日本軍の兵舎があったということだ。そのあたりは激戦地でなかったので、兵士たちも海で泳いだりして、私も一緒に遊んでもらえた。海の水は青くなかったが、茶色に濁ってもいなかった。だからペータイホーは黄河が茶色の濁流として海に流れ込む地点よりだいぶ東に離れたところだと思われる。東というのは、行くときの列車が東に向かって走り出したからだ。

兵隊さんはどの人も優しかった。なかでも「大尉」だと言う人は、子どもの心を和ませる暖かい笑顔をいつも浮かべていて、すぐ仲良しになった。あの人たちは妻子を故郷に残して、中国の僻地にいつ戦争に巻き込まれるかもしれない不安を抱えて来ていたのだ。そして毎日のように人を殺す訓練をしていたかもしれない。心は荒んできただろう。そうした彼らの日常性のなかに突然平和な顔をした日本の子どもがあらわれたのだ。その瞬間彼らの心は中国にいる現実を離れて妻子のいる故郷の空を飛んでいるのだった。

私の母には３人の兄と１人の弟がいた。つまり私には４人の伯父と叔父がいたのだが、政府の仕事をしていた１人と体調を悪くしていた１人を除いて、２人は出征して、帰ってこなかった。あのペータイホーの大尉や兵士たちはどうなっただろうか。

石神井川は、出会いのときから２０年後くらいして両岸がコンクリートで固められた。住民にとってその方が安全だと考えたのであろう。しかし水質はたちまち劣化し、濁って悪臭を放ち、疲れ切ったような水が、人も自然も無視して、ひたすら下流に急ぐばかりになった。川の周辺のあの魅力的だった風景はなくなり、美しさも、爽やかさも、涼しい風も消え、練馬は日本で一番暑い土地としてマスコミで取り沙汰されるようになった。練馬を愛していた私は故郷を奪われてしまった。今は軽井沢が頼みの綱であるけれど、ここも７５年ほど前に初めて来たときに受けた感動が少し失われつつある。まだまだ大丈夫だ。なにせここにはシンフォがあり、音楽を愛する仲間とその心があるのだから。音楽の歴史は自然への感動と戦争への怒りに満ちている。

私たちも叫びたい。戦争はよくない!　自然破壊はよくない！

江古田駅の近くに武蔵野音楽大学があり、その卒業生である女性の先生が小学校で音楽の授業を担当していた。ピアノを弾くというより、鳴らしながら歌わされた曲名はひとつも覚えていないが懐かしい。あの頃の小学校は音楽どころではなかったのだろう。今は同じ学校の卒業生から合唱を仕込んでもらっている。なんと素敵な因縁だろう。

越してきてしばらくは気がつかなかったが、練馬の家には蓄音機があった。４年生のころだったか、物置で見つけたのでびっくりして取りだし、掃除したまではよかったのだが、レコードがなかった。いや、１枚だけあった。だがそれがなんと広沢虎造の浪花

節だった。清水次郎長とか森石松といっても分からないし、長々続く物語だか歌だかも意味を与えてくれない。大人たちに聞いても、静岡県の偉い親分の話だというのだが、益々分からなくなる。ただ歌っている広沢虎造の声は素晴らしいと思った。結局蓄音機は再びお蔵入りになった。このままではクラシック音楽への道は閉ざされるしかなかった。

アイコサン

岡田 弥生（　アルト　）

１９９１年１２月２５日にソ連邦が崩壊しました。

この年の夏に開業した日ソ合弁企業のホテルとレストランは、激動の１９９２年に突入することになりました。何千％とも言われたインフレ。公務員の給料も、民間企業の従業員の給料も支払われず、「現物支給」という名のもとに給料代わりに製品を持ち帰りそれを転売する人あり、市場で買った牛乳を路上で倍の値段で売るおばあさんあり、商店の棚は空っぽなのに行列があり、「なんの行列ですか」と列の最後尾の人に聞くと「何か、あるらしい」と言うのでとりあえず行列に並ぶことになるので行列は長くなり、とにかく、何が何だか分からないけど、どういうわけだか餓死者は出ていない様子なのがまた不思議でもあり。闇の稼業の皆さんが縄張り争いを繰り広げ、現金収入のニオイのする場所を目ざとく嗅ぎつけて「守ってやるから金を出せ」と脅してきたり。保健所が「検査だ」とやってきて冷蔵庫の違反を摘発して罰金を徴収し（現金が足らなければ「お食事」をなさる)、役所など各所の窓口では書類だけでは却下されるので「お菓子やお惣菜」の上に書類を載せて提出する。町を歩けば警官が「ドキュメント」と身分証明書の提示を要求し、なんだかんだ文句をつけて（「偽造だろう」と決めつける手口）警察に連れていかれるくらいならと支払われる「罰金」が彼らの給料代わり。これが闇市愚連隊の日々でしょうか、という混乱の時期でした。

わが合弁企業ももちろん税金も払えない、家賃も滞納、従業員のお給料も「ドル建てとルーブル建て」の両方を支払う約束だったのにルーブル建ての給料しか出せず、東京の資本金が音を立ててモスクワに流れて行きました。

斎藤憐さんは胃癌と診断されて胃の３分の２を切除する手術をしました。病院のベッドの上でも増資を検討する憐さんに仲間の出資者たちは「こんな情勢なんだから、もうあきらめよう。これ以上、資金を集めても泥沼にはまる一方だ」と言うのでしたが、斎藤憐はあきらめない。早稲田露文科時代の同級生に電話をしまくり「だれかモスクワで働く人はいないか」と探し続けました。

そこに浮上したのが、ナムさん。露文科時代の同級生の友人の夫の合弁企業で働いていた朝鮮系ロシア人。まずはナムさんをモスクワに送り込んだのですが、モスクワは「そんな人間を雇う金があるなら、給料出せ」と反発。ナムさんも、のんびりしていてテキパ

キしてくれない。ナムさんを紹介した夫婦も責任を感じてしまい、妻の友人の妹に目を付けることになりました。
☆母親がロシア人だから、日常会話程度のロシア語はできる。
☆渋谷で経営していた甘味処を閉じて軽井沢で隠遁生活をしているからヒマである。
ということで、姉である人に「あなた、モスクワに行きなさいよ」と詰め寄られたのが、愛子さんという人です。
（1945 年 12 月 ハルビン生まれ。母がロシア人。父が日本の新聞記者。お姉さんは NHK のロシア語講座で活躍したローザ姉川さん）
当の愛子さんは当然のことながら無視。せっかく、ようやく、森の中で静かな生活を楽しんでいるのに何が悲しくてモスクワなんかに！
お姉さんはあきらめない。「一度、憐さんに会ってみなさいよ。憐さんの作るゴハンは美味しいのよ。一緒に憐さんの家に行きましょうよ」としつこく誘い、ついに妹の愛子さんを斎藤憐の家に連れてきました。断るつもりで憐さんの家にやってきた愛子さんでしたが、どういうわけだか帰る前には「じゃあ一度行ってみます」と言ったのでした。
後に「なんであの時、モスクワに行こうかなと思ったの？」と愛子さんに聞いたところ、「骸骨みたいに痩せこけた男の人が（胃がんの手術後、激やせ）ものすごい情熱で語り続けるから、なんだか気持ちが動いた」とのことでした。

1993 年の 2 月。愛子さんはモスクワに「とりあえず 3 か月、行ってみます」（ビザの期限がぎりぎり最長 3 か月）と旅立ちました。
モスクワでは、愛子さんをモスクワ観光に連れ出したりして適当にやり過ごそうと考えていたようでしたが、この愛子さんという人は、そんなことにごまかされる人ではありません。「金庫の鍵をちょうだい」「会計簿を見せて」「レストランの冷蔵庫の鍵をちょうだい」と迫り続ける。レストランのコック始め従業員はストライキ。ある朝とつぜん、誰一人としてレストランに出勤してこなくなった。愛子さんは淡々と冷蔵庫から骨付きの豚肉のかたまりを取り出して肉切り包丁で肉をさばき、キャベツを刻み、炊飯器でごはんを炊き、たった一人でお店を開けたのでした。
「レストランの従業員はぜんぶクビにします！！」
ロシア人支配人とは罵詈雑言の罵り合いを制し、金庫の鍵を奪い返した。「あんなに腹が立ったことは生まれて初めて。あんなにロシア語の罵詈雑言を自分が知っていたなんて驚き。ぶるぶる震えながら部屋に戻ってベッドに倒れ込んだんだけど、なんか、お腹の底から頭のてっぺんまで、すっこーんと抜けたみたいに気持ちがよくて」 東京ではあれこれ不定愁訴でいろいろな薬が手放せなかったのが、「気が付いたら薬なんて飲まなくなってた」
のちに愛子さん自身が分析したのですが、「10 歳で中国から日本にやってきて、言葉も分からない。アイノコといじめられるし目が大きいと笑われるから半分しか目を開けなかった。社会に出てからもそんなふうに、半分隠しながら生きてきたのかな。自分を全部

出したら、日本の社会では過剰だと知っていたのかな。その制御が、モスクワの廊下であの悪者のアブとやりあった時に外れた。半世紀にわたって抑圧されてきたロシアの血が噴き上がってきた」とのことでした。怒れるアイコサンの誕生。
会社の事務所の中にただ一人、物静かなキムさんという朝鮮系ロシア人がいて、この人がこの先、アイコサンをサポートしてくれることになります。
まずはレストランのスタッフ集め。いちおうは「和食のレストラン」なのだから、これまではロシア語のできる日本人板前さんとか、日本料理店で修業をしたロシア人の板前さんとかを雇っていたのですが、「そんなの要らないわよ」とアイコサン。「家庭料理を作れる女性たちとお店をやっていきます」
そこでキムさんが朝鮮系の女性たちを面接に連れてきました。料理ができる人たちは厨房に。料理が下手な人はホールに。この時やってきたラリーサという女性が、アイコサンの右腕になっていきます。ラリーサは料理の天才。アイコサンが一回教えただけで、なんでも作れる。ひじき煮や白菜の八宝菜風など、びっくりするくらい美味しい。レストランのメニューは海外の日本料理店ではお目にかかれないようなメニューになっていきます。「餃子」(朝鮮系の人たちはマンドゥを作ります)「メンチカツ」(餃子のあんをカツにしただけ)「ホッケの干物」「白菜のくたくた煮」(八宝菜風)「カニクリームコロッケ」「麻婆豆腐」「もやし炒め」(朝鮮系のコミュニティでは豆腐やもやしを作っていた)などなど、日本の家庭料理のお店になっていきました。
とはいえ、レストランに来てくれるお客さんは少なかった。当時のモスクワには日本料理のお店は他に２軒。どちらも日本人の板前さんがいて、刺身やスキヤキなど「ちゃんとした」和食のお店。そしてどちらも立地条件に恵まれていました。1 軒は市の中心部、1 軒は駐在事務所が集められているビル（世界貿易センター）内にありました。それに比べて我がレストランは、競馬場横の、なんとも冴えない外観のホテルの 8 階。入口を入った 1 階は薄暗く、煙草の煙でかすんでいる。いくつも並ぶゲーム機にとりつく男たち。そんなロビーを抜けた先にある古びたガタピシのエレベーターで８階まで。(これたまたしょっちゅう故障して止まる。ただしドアをどんどん叩くと、その音を聞きつけた周囲の人がドアをヨッコラショとこじあけてくれる。)
「どうやったらレストランにお客が来てくれるのか」思案を巡らすアイコサンの目に入ってきたのが、倉庫に山積みになっているプラ製のお弁当箱でした。開業当時に東京から搬入されたまま、ろくに使われもせずに残っていたもの。ひらめきアイコ発動。「お弁当お電話一本で一個からお届けします」という案内を、日本人会名簿の会社あてにＦＡＸしたのでした。他のレストランでもお弁当の注文は受け付けていましたが、「要予約」だし最低でも数個からだし、料金も２０ドル以上はしたと思いますが、アイコサンのお弁当は８ドル。もしも本当に 1 個のお弁当を配達するなら、まったく計算が合いません。それでも「やる」というのがアイコサンです。

ある日、日本大使館から「大使館の食堂を工事するので、日替わり弁当を配達してくれ

ませんか」という依頼が入りました。１９９３年当時のモスクワでは、「昼休みに近所でランチを」などということはありえないことなのです。大使館でも企業でもみな、自前の食堂を持っていて、そこで昼食を提供していました。
こうして「家庭料理の店」は「お弁当１個から配達」するし「日替わり弁当も配達します」ということになりました。
大使館に日替わり弁当を届けていることを聞きつけたマスコミ各社も「土日にお弁当を届けてくれ」と言ってきました。マスコミ各社も平日は食事を提供してくれるスタッフがいますが、土日の食事には苦労していたのです。アイコサンはもちろん快諾。
やがて商社やメーカーの駐在事務所からも「うちにも弁当届けてよ」という依頼が。ロシア人スタッフの作る食堂のゴハンより、「とんかつ弁当が、生姜焼き弁当が、スキヤキ弁当がほしい」アイコサンはもちろん引き受けます。そしてお弁当配達も、アイコサンの仕事なのです（ 運転手にドルキャッシュのやりとりを任せられないため。ちなみに、ドルキャッシュのやりとりは違法であります…ルーブルキャッシュかカード決済のみが認められている。しかし、ドルキャッシュを得なければ商売はたちゆかない現実…このハンザイは時効でしょうか …）
お弁当の売り上げはどんどん増えていき、この調子なら累積赤字も止まるかな、現地の売り上げだけで給料を払えるかな、という驚異の日々でした。「とりあえず３カ月」でモスクワ入りをしたアイコサンは、その後も３カ月が経過するたびに「とりあえず、もう３カ月、やってみます」とモスクワ滞在を続けてくれました。

そしてこの年１９９３年１０月４日。東京のテレビに恐ろしいニュース映像が流れました。モスクワ川添いの白亜の建物が砲撃され、破壊された窓から吹雪のように大量の紙が舞い散っていました。真白の壁は炎に焼かれて真っ黒になっていました。モスクワ川の橋の上に戦車が並び、砲弾はその戦車から発されていました。
これはいったい何なんだ？？？　ニュースの解説によれば、エリツィン大統領に反対する一派の武装勢力が国会議事堂（通称ホワイトハウス）を占拠、大統領の治安部隊と衝突、ロシア軍の戦車部隊がホワイトハウスを砲撃し、反対勢力が降伏した、という事件であったのです。
砲撃されたビルは、国会議事堂だったのです。モスクワの真ん中クレムリンから見ると地図の左の方。「アルバート通り」という立派な通り（旧コメコンのビルなどもあった）がモスクワ川につきあたると幅の広い、長い橋になり、ここからがクツーゾフスキー大通り。要するに、都会のど真ん中です。のちに放送されたTBSの金平記者の「報道特集」の映像では、駐車中の車を遮蔽にして中腰で歩む記者が、銃撃の音が聞こえたのか「わ。わ。わ」と飛びのいたり隠れたりする様子が見られました。
東京の自宅でテレビを見ながら、「自分の国の軍隊が、自分の市民を砲撃するのか」と恐れおののいていたのをはっきりと覚えています。窓から舞い散った書類の紙、その窓の中には人間たちがいたのです。「愛子さんはどうしているだろう」と心配でした。

アイコサンから FAX が来ました。「ホワイトハウス、真っ黒です。そんな中でも、道路を迂回してお弁当を届けております」
東京は仰天。お弁当を配達してるだと！？
ホワイトハウスを砲撃した戦車が集結していたのがクツーゾフスキー大通りの橋。マスコミ各社の支局は、そのクツーゾフスキーの橋のすぐ近くに集まっています。モスクワの北西部にある合弁企業のレストランからは、ふつうであれば、まっすぐ南下、モスクワ川を渡ればいいのですが、南下する道路は封鎖されて使えず、町の大環状線まで北上してからぐるっとまわって、町のいちばん南からクツーゾフスキーをめざす、という大回りで配達したのだそうです。
その後、モスクワの日本人社会に「あの時、弁当配達したんだって？」とウワサが広まり、「じゃあレストランにも行ってみるか」と閑古鳥の鳴いていたレストランにもお客が集まってくるようになり、勢いのついた商売は良い方向へとどんどん進んでいくことになったのでした。
もちろん、この先も「なんだそれ」「どうしてこんなこと」が次々とやってくるのですが、とりあえずは破産をまぬかれ、どうにか自活できるようになったのが１９９３年の暮れでした。
お正月には「もうモスクワもおしまいかも」と思われていたのに、絶対にあきらめない憐さんと、逆境に燃え立ち次から次へとアイディアを繰り出す愛子さんは絶好のコンビなのでした。

愛子さんという人は、自分のことを話されるのを嫌っていました。けれども愛子さんは２０１７年に亡くなってしまったので、もう、愛子さんのことを書いても、許されるかなあと思って、書きました。彼女の話は、またいつか、ご紹介したいと思います。

【編集後記】
☆真﨑さん待望の連載第３回「蓄音機」、とはいえ蓄音機のお話はなかなか出てきません。練馬の石神井川から中国の空へと時空をめぐり、ようやく出てきた蓄音機。つづきは次回をお楽しみに。
☆「原稿がない時の埋め草に」と書いたモスクワ話の続き。(「埋め草」というには長すぎますが)１９９３年モスクワ１０月政変」でネット検索すると、上半分が真っ黒のホワイトハウスの画像が載っています。(岡田)